

## モンゴル人民政府と新疆（1921-1924）

青 木 雅 浩

### はじめに

20世紀のモンゴルでは独立と統一を目指すモンゴル人の運動が各地で発生した。ソヴィエト＝ロシア<sup>(1)</sup>、コミンテルンの援助を受けて成立したモンゴル人民政府（以下「人民政府」）も事実上の独立的地位を獲得すると、各地のモンゴル人との関係を築いた。その中には新疆のモンゴル人も含まれていた。

人民政府と新疆の関係に関する従来の研究では、新疆における人民政府の活動は、イリ<sup>(2)</sup>等のモンゴル人と関係を樹立して彼らを中国の抑圧から解放することを目的とし、1921年にモンゴル人民臨時政府代表の新疆派遣計画が立案され<sup>(3)</sup>、1922年に新疆に派遣された人民政府代表が新疆モンゴル人との関係を樹立し、「ウイグル住民」とも関係を築いた<sup>(4)</sup>ことが指摘された。先行研究ではこれらの活動を、「人民政府が、民族として1つであるモンゴル人の間のつながりを強化し、彼らの間に人民政府の政策を宣伝し、西部地域の多くの民族をモンゴル国に含める」<sup>(5)</sup>活動として描いている。

だが、多くの民族、国家が関わる新疆における人民政府の活動を、モンゴル人の運動という視点から分析するだけでは、この活動が持った意義を解明したとは言えないはずである。特に、この活動には、人民政府にも新疆にも深く関与していたソヴィエトとコミンテルンが関わった。ソヴィエトとコミンテルンがこの活動にどう関わったかを分析することは、この活動の実情と意義を解明するために重要であろう。新疆における人民政府の活動とソヴィエト、コミンテルンの関係について従来の研究では、新疆におけるコミンテルンの活動に対して「モンゴル人共産主義者」の支援があったことが示唆され、モンゴル人民党代表ナーツォフのコミンテルン宛報告メモが紹介されただけであり<sup>(6)</sup>、十分な研究はされていない。ソヴィエト及びコミンテルンとの関係から新疆における人民政府の活動を分析することで、統一と独立のためのモンゴル人の運動としての意義のみならず、新疆における人民政府の活動と中央アジア及び東アジア情勢、中ソ関係との関わりを解明できるだろう。

本稿では、1920年代前半の新疆における人民政府の活動に対するソヴィエト、コミンテルンの関与を中心に考察する。このため、まず新疆における人民政府の活動を概観し、この活動におけ

る人民政府の意図を検討する。次に、この人民政府の活動に対してソヴィエト、コミンテルンが取った姿勢を考察する。そしてこれらを通じて、モンゴル人の統一と独立を目指す運動と国際情勢の関係の一端を解明する。

## I. 人民政府の成立と20世紀初頭の新疆

1911年に内外モンゴルの王公、仏教勢力がモンゴルの独立と統一を目指したモンゴル独立運動が起こり、ボグド=ハーン政権が成立した。この政権はロシア帝国を後ろ盾として運動をモンゴル各地に展開したが、1915年のキャフタ三国協定によって中華民国の宗主権下の外モンゴル自治が規定された。だが革命でロシア帝国が崩壊すると、中華民国は1919年末に外モンゴル自治を廃止した。この時、モンゴル人の自治復興運動が起こり、この運動の中からモンゴル人民党（以下「人民党」）が成立した。人民党はソヴィエト=ロシアに援助要請の使節を派遣した。この使節を受け入れたのはロシア共産党中央委員会シベリア局東方諸民族部であった。この部は1921年初頭にコミンテルン極東書記局に改組されたが、極東書記局も人民党と深い関わりを持った。当時の人民党の主な活動地域は、ロシアと外モンゴルの境界にあるキャフタ周辺であった。

1920年秋に、ロシアの反ボルシェヴィキ派、所謂ロシア白軍のロマン=フョードロヴィチ=ウングエルン=フォン=シュテルンベルグが外モンゴルに進軍した。彼は1921年2月にフレー<sup>(7)</sup>を占領し、彼の影響下に外モンゴル自治政府が再興された。これに対してソヴィエト=ロシアとコミンテルンは人民党への援助を推進した。

こうして、1921年3月1-3日に人民党の組織会議が開催され、同13日にモンゴル人民臨時政府（以下「人民臨時政府」）が成立した。やがて人民党の人民義勇軍、ソヴィエト=ロシア赤軍、極東共和国軍がフレーへ進軍し、1921年7月11日に人民政府が成立した。

結成当初、人民党は外モンゴル自治復興を目指したが、やがて外モンゴル以外の各地のモンゴル人との関係も築き始めた。人民党はソヴィエト=ロシアに対して外モンゴルへのタンヌ=ウリヤンハイ<sup>(8)</sup>の併合を主張し、人民臨時政府成立後に代表官チャグダルジャブ<sup>(9)</sup>を派遣した<sup>(10)</sup>。人民政府成立後にはフルンボイルとの関係樹立が本格化し、1923年の人民党第2回大会にフルンボイルの代表フーミンタイ<sup>(11)</sup>が参加した。その後彼等が属するフルンボイルの活動家グループは人民党東方部と規定された<sup>(12)</sup>。これと同様に、人民政府は新疆モンゴル人との関係樹立を目指したのである。

人民政府が関与した20世紀初頭の新疆では、辛亥革命の影響で革命派の蜂起がイリ等各地で起こった<sup>(13)</sup>。この時、ドンガン<sup>(14)</sup>の部隊を活用して新疆支配を確立した<sup>(15)</sup>のが楊增新<sup>(16)</sup>だった。楊は新疆の民族的多様性を考慮し、新疆各民族の不満を、その支配者層を取り込むことで抑えた<sup>(17)</sup>。

ロシア革命後、逃げ込んできたロシア白軍のA.S.バキチ<sup>(18)</sup>等が新疆で勢力を強めた<sup>(19)</sup>。楊増新はロシア内戦に対して中立を守ろうとしたが、白軍の駐屯による新疆の情勢悪化を受けて態度

を変えた。新疆当局とソヴィエト側の間で白軍掃討の共同作戦に関する協定が締結され、1921年5月に赤軍は新疆に入った。バキチは1922年に逮捕された<sup>(20)</sup>が、新疆には小規模のロシア白軍が留まり、ソヴィエトに対する攻撃を続けた<sup>(21)</sup>。

辛亥革命の際に、新疆に居住するトルコ系ムスリムはハミ、トルファン等で反乱を起こした<sup>(22)</sup>。当時、楊增新はトルコ系ムスリムに対して従来の権威、教育を認める一方で、近代的思想の流入を防いだ<sup>(23)</sup>。漢語教育とクルアーンに基づく教育しかないトルコ系ムスリムの間で近代的教育を普及させる運動が起こったが、漢人のみならずイスラムの支配者層、宗教知識人層の反発を受けて失敗した<sup>(24)</sup>。

新疆モンゴル人の間には、辛亥革命に応じる者と、モンゴル独立運動に応じる者がいた。ボルトルではチャハル=モンゴル人が騎兵隊を組織し、イリの反清蜂起に参加した<sup>(25)</sup>。モンゴル独立運動に応じた人物としてはソミヤーが挙げられる。ソミヤーは1874年にイリ=チャハル左翼鑲黃旗に生まれ、イリ=チャハル左翼総管等を務めたが、反漢闘争も進めていた。宣統3（1911）年11月19日、イリの清朝軍とチャハル左翼8旗の間に衝突が起こり、ソミヤーは麾下の152戸552人を連れてイリを去った。彼らはセミレチエ<sup>(26)</sup>地方を経由して外モンゴルに入った。ボグド=ハーン政権は彼にキャフタ近辺の哨戒所の地を与えた。ソミヤーはボグド=ハーン政権の内モンゴル派遣軍に従軍して大功を立て、1915年末にキャフタ付近の28哨戒所の長に任命された。またキャフタ西方の3哨戒所の土地を得てトゥシェート=ハン=アイマグ管轄下の1旗を建設した<sup>(27)</sup>。

一方、1913年にアルタイ地区<sup>(28)</sup>の王公ミシグトングロブは、外モンゴルの支配を脱して中国側に付く意思を新疆政府に表明した<sup>(29)</sup>。1919年末以降、アルタイ地区で新トルグートの王公が新疆省政府に新たなザガグ印を請求した<sup>(30)</sup>。20世紀初頭のモンゴルを巡る複雑な政治情勢に対して、1910-1920年代のアルタイ地区、新疆のモンゴル人は、外モンゴルと中国に対して様々な反応を示したのである。

## II. 新疆におけるモンゴル人民政府の活動

### 1. 新疆へのモンゴル人民政府の代表派遣

新疆モンゴル人との関係樹立は人民臨時政府で既に計画されていた。この計画に関与したのが上述のソミヤーと彼の弟デムベレル等であった。キャフタ付近に居住していたソミヤー等は、1921年初頭以降、人民党の活動に関わるようになったのである<sup>(31)</sup>。

1921年3月24日の人民臨時政府会議で、中国の抑圧からモンゴル人を解放する人民臨時政府の活動に協力して人民義勇軍に参加するようイリのモンゴル人に宣伝するため、ソミヤー等のイリ派遣が決議された。だがソミヤーの旗のメンゲトがロシア白軍のスハレフと共に騒乱を起こしたため、この計画は中止された<sup>(32)</sup>。デムベレルの回想録には“5月<sup>(33)</sup>にもこの議題が人民臨時政府の会議で協議された”<sup>(34)</sup>とあるが、代表が派遣された可能性は低い。

人民政府成立後、新疆モンゴル人との関係樹立の動きが本格化した。これに関してリンチノ<sup>38</sup>は、1925年6月25日のモンゴル人民革命党<sup>39</sup>中央委員会会議における報告で、人民政府代表が1922年と1923年に新疆へ派遣された、と述べた<sup>40</sup>。

1922年の代表派遣に関する先行研究によると、人民政府が国家統治を行う一方で、中華民国では漢人の権力闘争が行われている、という実情を正しく伝え、返答を得るために、1922年春に人民政府首相ジャルハンズ=ホトクトがイリのモンゴル人宛の書簡を作成した。1922年7月初頭、この書簡を持って新疆に赴いたデムベレルはまずウールド営<sup>41</sup>上旗のナサンバト等の有力者達に会った。ウールド営上旗の人々は会議を開き、デムベレルはこの会議で外モンゴルとの関係樹立の重要性を説いた。これに対してウールドの代表達は、中国から離れて外モンゴルに統一することを以前から望んでいたことを表明した。その後デムベレルは、タルバガタイ、アルタイ=トルグート、チャハル、ウールド等の代表を招集して7月10日に会議を開いた。これら代表達は、ジャルハンズ=ホトクトの書簡に対する返答として、武器と軍隊の送付と漢人勢力の一扫を要請し、ソミヤーをイリのモンゴル人の代表に任命する文書を、ナワーンに持たせてデムベレルに同行させた<sup>42</sup>。

この時のデムベレルの活動について、1922年9月25日付トルキスタン共産党<sup>43</sup>ジェティス州委員会発ロシア共産党中央委員会中央アジア局宛デムベレルの身分証明文書には、デムベレル等が現地の「カルムィク」<sup>44</sup>や、クルジャ<sup>45</sup>の革命組織と接触し、ノヴァン（Нован）と行動を共にするようになった、と記されている<sup>46</sup>。このノヴァンは上述のナワーンのロシア語式綴りであろう。彼の名は1922年以降、新疆との関係に関わる人民政府の公文書に度々登場する<sup>47</sup>。彼は人民政府との関係樹立後、新疆モンゴル人の1代表として外モンゴルに滞在し、新疆における人民政府の活動に関与したのであろう。

先行研究が示した文書の他にも、新疆モンゴル人がデムベレルに渡した文書はいくつか存在する。共戴12年7月16日<sup>48</sup>付ソミヤー宛ウールド営中旗<sup>49</sup>会盟〔Среднеолетский сейм〕及び他の10地区<sup>50</sup>の各代表發文書には、ソヴィエト=ロシアとモンゴルへの援助要請を決めたので代表を外モンゴルに派遣すべきだが、「権力者たちが諸外国の状況や新たな革命期の原則をよく知らないこと」と、「漢人がこのことについて知ったら、我々に対して大災難をなしてしまう」ことを考慮して、ソミヤーを代表に選出した、と記されている<sup>51</sup>。これによると、ソミヤーの代表選出には、人民政府へ代表を直接派遣するリスクを避けるという意味があったことになる。またこの文書には民族統一を求める記述がない。新疆モンゴル人は現状に鑑みて、人民政府の呼びかけに対して複雑な対応を示したと考えるべきであろう。

1923年の新疆での人民政府代表の活動の実態は、史料が少なく不明である。おそらく1922年と同様の意図のもとに活動が行われたと推測される。

## 2. 新疆における活動に対する人民政府の意図

1922年のデムベレルの新疆派遣について、上述の1922年9月25日付デムベレルの身分証明文書には、デムベレルが人民政府代表として「新疆のカルムイク住民との関係樹立のため」に「アビライ、ツェレン」<sup>(49)</sup>等と共に新疆に来た、と記されている<sup>(50)</sup>。この文書の記述と、上述のデムベレルの活動から考えると、人民政府は、新疆モンゴル人と関係を樹立し、彼らを中国から切り離して人民政府側に引き付けることを目的として、デムベレルを新疆に派遣したのであろう。

この一方で、新疆における人民政府の活動をより広く活用しようとする人々が人民政府内にいた。リンチノは、1925年6月25日のモンゴル人民革命党中央委員会会議における報告で、新疆における活動が「係争中のアルタイ地区の命運を我々にとって有利に解決するのにかなりの程度寄与する」と指摘した<sup>(51)</sup>。当時、人民政府はアルタイ地区の領有権を主張し、ホブドを挟んで新疆省側と対立していた<sup>(52)</sup>。新疆における人民政府の活動がこの問題に利用できるとリンチノは考えたのである。

またアマガエフ<sup>(53)</sup>は、将来行われるモンゴルと中華民国間の交渉<sup>(54)</sup>に対して、「モンゴル人が居住する中国諸地域、つまりバルガ、内モンゴル、中国トルキスタン<sup>(55)</sup>の世論を動員すること」を主張し、「それらの地のモンゴル人をデモに、可能なら中国のショーヴィニストに対する蜂起に動員する必要がある。要するに、これらモンゴル人の住む中国の地域の積極性が、北京の帝国主義者達の欲望を鎮めるようにする必要がある」と述べた<sup>(56)</sup>。アマガエフは、新疆における人民政府の活動を、単に新疆における問題とのみ捉えるのではなく、対中関係にも活用することを考えたのである。

## Ⅲ. 新疆における人民政府の活動とソヴィエト、コミンテルン

新疆における人民政府の活動にはソヴィエト、コミンテルンが深く関与していた。例えば、新疆モンゴル人はソヴィエト＝ロシア宛の援助要請文書をデムベレルに出している。1922年9月7日付ワールド上党会盟<sup>(57)</sup> [Верхнеолетский сейм] 代表ナサンバト及びイリ地域の他の10地域の諸代表発ソヴィエト＝ロシア宛文書では、外モンゴル自治廃止までのイリのモンゴル人の行動と漢人の圧迫が記述され、イリのモンゴル人の代表としてソミヤーを選出し、中国の支配からの解放と民族的統一に対して、ソヴィエト＝ロシアに援助が要請された<sup>(58)</sup>。また第Ⅰ節で触れたように、共戴12年7月16日付ソミヤー宛ワールド営中旗会盟等各代表發文書にも、ソヴィエト＝ロシアへの援助要請の記述がある。これらの記述は、新疆での人民政府の活動にソヴィエト＝ロシア、コミンテルンが関わった可能性を示唆するものであろう。このため、人民政府の活動とその意図を追求するだけでは、新疆における人民政府の活動の実情と意義を解明するのは難しい。そこで本節では、ソヴィエト、コミンテルンが新疆における人民政府の活動と如何なる関係を持ったかを検討し、この活動の意義を考察する。

## 1. 新疆におけるモンゴル人と「ウイグル住民」の関係とソヴィエト、コミンテルン

先行研究では、1922年に新疆の「ウイグル住民」の代表がデムベレルと面会し、モンゴルと「ウイグル住民」の共同反漢闘争を行うことを提案し、モスクワに赴いたことが指摘された<sup>39)</sup>。この問題には、ソヴィエト＝ロシア、コミンテルンが関与していた。上述の1922年9月25日付デムベレルの身分証明書によると、デムベレルが新疆モンゴル人の運動の準備に成功したのを見て、中国の専制と抑圧にさらされた「ウイグル住民」<sup>40)</sup>が、モスクワの党の各機関でこの問題を解決するため、新疆モンゴル人と共に活動し、代表を派遣することにした。この文書には、「ウイグル住民」の代表として、マフムード＝ホジャ＝ヤロフ、ミラム＝イミノフ、アサドゥッラー＝シャイフ＝ハフィゾフ、カーディル＝ハジ＝ハシム＝ハジェフの4人の名が挙げられた<sup>41)</sup>。この文書によると、彼らは革命連合「ウイグル」、トルキスタン共産党、「革命地下組織」のメンバーであった<sup>42)</sup>。

1919年以降、新疆からソヴィエト側中央アジアに移った人々が、各地に同盟組織を結成した。革命連合「ウイグル」等はこのような中国出身者の同盟組織<sup>43)</sup>であった。コミンテルンはこれら組織の統合を目指し、1921年1月にセミレチエ州の中心地ヴェルヌイ<sup>44)</sup>で第1回セミレチエ州大会を開催<sup>45)</sup>した。また1921年6月には革命連合「ウイグル」とアルティ＝シャフル<sup>46)</sup>労働者同盟の統合を目指してカシュガル・ジュンガル労働者と貧者の第1回大会が開催された。この頃ヴェルヌイでは、ロシア共産党セミレチエ州都市委員会の下にウイグル人共産主義者支部が活動し始めていた。1922年9月、ヴェルヌイでウイグル人共産主義者第1回州大会と革命連合「ウイグル」の第2回州大会が開催され、コミンテルン第4回大会の代表を選出した。1923年には中国新疆の革命家大会を開催する試みがなされた。セミレチエ州だけでも全部で約50の革命組織・共産主義組織が存在し、そこには1500人に達する「ウイグル人」党員が加わった。コミンテルンは新疆から来た人々をソヴィエト式教育施設で教育し、新疆における活動を進めようとした<sup>47)</sup>。

このような新疆、中央アジアの状況から考えると、ホジャ＝ヤロフ等は元来ソヴィエト側中央アジアで活動していた可能性が高く、デムベレルとの接触前からソヴィエト＝ロシア、コミンテルンと関係を持っていたと思われる。上述の通り、新疆における人民政府とコミンテルンの関係について先行研究では、「モンゴル人共産主義者」が新疆におけるコミンテルンの活動を助けた、と考えられてきた。だが実際には、新疆及び中央アジアでまとまりつつあった一部のムスリムのグループが反漢闘争を共通の目的として、人民政府及び新疆モンゴル人と連携しようとした際に、コミンテルンが媒介になったのであろう。コミンテルンは、中央アジアと新疆のムスリム活動家グループをまとめると共に、そこに新疆モンゴル人も抱え込もうとしたと考えられる。

1925年6月25日のモンゴル人民革命党中央委員会会議の報告でリンチノは、1924年秋に新疆のモンゴルとムスリムの革命民族勢力の成立大会が、コミンテルンの指導の下に外モンゴルの代表も参加して行われるはずだったが、なぜか開催されなかった、と述べた<sup>48)</sup>。この記述から、少な

くとも1924年頃までは、1922年に始まった新疆のモンゴル人、人民政府、新疆のムスリム勢力、コミンテルンの繋がりが継続したと考えられる。

## 2. 新疆における人民政府の活動に対するコミンテルンの意図

コミンテルンは特に1923年の新疆への人民政府の代表派遣に強く関与した。ここから、新疆における人民政府の活動に対するコミンテルンの意図を解明できる。リンチノは、1925年6月25日のモンゴル人民革命党中央委員会会議における報告で、1923年の新疆への人民政府の代表派遣はコミンテルンとの共同活動だったと述べた<sup>(79)</sup>。また彼は、1925年12月24日付の論文「モンゴル、ソ連、中国」に、「1923年の夏、コミンテルンは、中国トルキスタンにおける革命活動の設立の必要性に原則的に同意」し、ナーツォフとデムベレルが派遣されたが、後者は「モンゴル人民革命党から派遣された」と記した<sup>(70)</sup>。人民党からの派遣が付記されたデムベレルに対して、ナーツォフがコミンテルンの任務を受けたと考えられる<sup>(71)</sup>。

ナーツォフ（シレン=アラブダノヴィチ=ショイジェロフ）は、コミンテルン職員として人民党の活動に早くから関わったブリヤート=モンゴル人活動家である。1921年春にコミンテルン極東書記局の指示で人民党の活動に関わるようになった<sup>(72)</sup>。1921年4月にコミンテルン極東書記局によって西モンゴルに派遣され、1923年6月まで活動した<sup>(73)</sup>。彼が新疆における活動報告をコミンテルンに提出したことが先行研究で明らかになっている<sup>(74)</sup>。

ナーツォフの活動目的を検討することは、新疆での人民政府の活動に対するコミンテルンの意図を解明することにつながる。1924年1月19日付でホルゴス<sup>(75)</sup>からコミンテルン執行委員会東方局に宛てた電報で彼は、「汎モンゴル主義の冒険主義的傾向を破壊するため」にクルジャに赴くことを主張した<sup>(76)</sup>。「汎モンゴル主義的傾向」の破壊とは、地域の枠を越えた各地のモンゴル人の結び付きを阻止することを意味すると考えられる。

だが、後にナーツォフは新疆モンゴル人の活動をフルンボイルや内モンゴルのモンゴル人の運動と結びつける計画に賛同し、この計画を「汎モンゴル主義的」ではないと主張し、コミンテルン執行委員会東方局局長 F.F.ペトロフを説得しようとした<sup>(77)</sup>。このことから、「汎モンゴル主義的傾向の破壊」はナーツォフ自身の考えではなく、コミンテルンの意図であったと考えられる。

このコミンテルンの意図についてリンチノが重要な記述を残している。上述の論文「モンゴル、ソ連、中国」でリンチノは、新疆における活動について1923年6月30日に彼が人民党を代表してコミンテルンと交渉した、と記した<sup>(78)</sup>。新疆における人民党、人民政府の活動は、コミンテルンと交渉した上で行う必要があったのである。この交渉の結果、上述のコミンテルンの同意が得られたのであろう。

この同意は、この交渉でリンチノが示したテーゼによって得られたようである。論文「モンゴル、ソ連、中国」におけるリンチノの記述によると、彼はこの交渉でコミンテルンに示したテー

ぜに、「中国の自由で兄弟的な諸民族の全中国民族連邦共和国の建設…のスローガンのもとにある、中国辺境の少数民族と抑圧された者達の間の革命的結合と、革命的活動の創立」が世界及び中国の革命運動の課題である、と記した<sup>(79)</sup>。このテーゼは、中国領内の少数民族に関わる活動は、モンゴル人に関するものでも、中国領という枠組みを維持したまま行なうことを規定したものであろう。リンチノは、これをテーゼとしてコミンテルンに約束させられたとも解釈できる。

新疆モンゴル人と人民政府が地域の枠を越えて過度に結びつくことをコミンテルンが望まなかったことについて、以下の3点を考慮する必要がある。第1に当時の中ソ関係である。ソヴィエト国家の正式承認と安全保障、国交正常化、両国間の懸案解決等のために1920年以降行われた中ソ交渉は、長期にわたって難航した。その原因の1つがモンゴル問題であり、ソヴィエト側は自軍の外モンゴル撤兵<sup>(80)</sup>を一貫して拒否していた。だが1923年前半頃にソ連は、外モンゴルに対する中華民国の主権と外モンゴル駐屯ソ連軍の撤退を認めることで中華民国側に譲歩し、交渉の終結を目指し始めた。1923年9月以降、ソ連全権代表 L.M.カラハン<sup>(81)</sup>はこの方針で対中交渉を進め、1924年5月31日に中ソ協定が締結された。このような時期において、人民政府と新疆モンゴル人の過度の結びつきは、中華民国を刺激しうるものであり、ソ連にとって避けたいことだったはずである。そのため、1923年3月にソ連外務人民委員 G.V.チチェリンがモスクワ駐在モンゴル全権代表部に対して、イリが中国領であることを表明し<sup>(82)</sup>、新疆における人民政府の活動の過度の拡大に釘を刺した。また先行研究で指摘されたナーツォフのコミンテルン宛報告には、新疆土着民族の武装蜂起は、全中国規模で我々が行っている外交活動に損害をもたらしうる、と記されている<sup>(83)</sup>。新疆における民族運動が、中ソ間の様々な外交活動の障害になりうるという認識がコミンテルン側にあった可能性は高い。

第2にソ連、コミンテルンと中国国民党の関係である。ソヴィエト＝ロシア及びコミンテルンは1920年頃から国民党に注目し、国民党もソ連から軍事援助を得ようとした<sup>(84)</sup>。1923年1月26日付 A.A.ヨッフエ<sup>(85)</sup>発、チチェリン、V.I.レーニン、L.D.トロツキー等宛書簡には、“孫文とソ連の直接の接触の強化のために新疆での孫文の影響を強化し、孫文の軍をモンゴル国境まで動かし、そこで新疆やウルガ<sup>(86)</sup>を通じてソ連との接触を行う。孫文の軍をソ連の力で十分に武装した後、北伐が成功裏に遂行される”という孫文の計画が記されている<sup>(87)</sup>。1924年1月8日付カラハン発チチェリン宛書簡には“この計画はソ連外務人民委員部の反対に遭ったが、チチェリンとカラハンが賛同し、ロシア共産党中央委員会で一定程度認められた”と記されている<sup>(88)</sup>。このように、1923年にソ連は新疆を孫文支援のルートと認識していたのである。そのため、地域の不安定と国民党の反感を惹起しうる「汎モンゴル主義」的な新疆と人民政府のつながりをソ連、コミンテルンは望まなかったのであろう。

第3に当時の新疆、中央アジア情勢である。内戦は終結したが、新疆にはまだロシア白軍残党が存在し、ソ連への攻撃を行っていた。また新疆と隣接する中央アジアでもバスマチ運動<sup>(89)</sup>が続



いていた。不安定な新疆情勢に鑑み、人民政府の対新疆活動がこれ以上の不安定を惹起しないように、コミンテルンは人民政府の活動を管理しようとしたのであろう。

### おわりに

人民政府と新疆の関係に関する従来の研究は、新疆への人民政府の代表派遣を、20世紀に広く行われたモンゴル人の統一と独立を求める運動としてのみ描いてきた。これに対して本稿では、ソヴィエト、コミンテルンとの関係を中心に、人民政府と新疆の関係の新たな側面を解明した。

新疆における人民政府の活動を人民政府の呼びかけに対する新疆モンゴル人の対応は様々であった。全員が外モンゴルとの統一を望んだわけではなく、人民政府への代表派遣を躊躇する姿勢も見られた。人民政府は新疆モンゴル人との関係樹立のために新疆での活動を始めたが、リンチノ、アマガエフはこの活動を、新疆だけに留めず、対中関係等に利用しようとしていた。

新疆における人民政府の活動はムスリムの運動とも関係を持ち、中央アジアの民族運動の一部としての意義を持った。このときに媒介となったのがコミンテルンであった。新疆におけるモンゴルとムスリムの繋がり、ソヴィエト及びコミンテルンの対中央アジア・東アジア戦略に関わるものであった。このソヴィエト、コミンテルンの東アジア戦略が特に強く反映されたのが、1923年の新疆における人民政府の活動に対するコミンテルンの関与である。新疆における人民政府の活動は、ソ連及びコミンテルンにとって、中ソ関係や地域の安定を乱しうるものであった。フルンボイル及びタンヌ＝ウリヤンハイと人民政府の関係にソヴィエト、コミンテルンが関与した時には、ソヴィエト国境の安全保障がその要因となった<sup>(90)</sup>。これと同様に、ソ連の安全保障に関わる中ソ交渉の進展<sup>(91)</sup>と中央アジア情勢の安定のために、コミンテルンは新疆における人民政府の活動に関与したと考えられる。これらを考慮すると、ソヴィエトとコミンテルンは、1920年代前半の人民政府のモンゴル各地への進出を、自国家の安全保障の観点からコントロールしようと試みたと言えることができる。

このようにソヴィエト、コミンテルンとの関係から新疆における人民政府の活動を考察することで、この活動が新疆におけるモンゴル人の運動のみならず、東アジア情勢、中央アジア情勢に深く関わるものだったことが明らかになるのである。

### 注

- (1) 本稿ではロシアのソヴィエト政権を、1922年末まではソヴィエト＝ロシア、それ以降はソ連、両者を総称する際には便宜的にソヴィエトと表記する。
- (2) バルハシ湖に注ぐイリ河流域の盆地地域 (『事典』p.67)。
- (3) Лонжид1994 pp.44-45、Мягмарсамбуу2008 pp.34-37
- (4) Мягмарсамбуу2008 pp.50-60
- (5) Мягмарсамбуу2008 p.50

- (6) Бармин1999 pp.88-89
- (7) 現オランバートル。
- (8) 現在のロシア連邦トゥヴァ共和国に相当する地域。
- (9) 人民党の活動に早くから尽力した人物。人民臨時政府首相等を務めたが、1922年に粛清された。
- (10) バトバヤル・シャラフー1998、Пүрэв2001 pp.27-31等。
- (11) フルンボイルの活動家。人民党との関係を樹立し、内モンゴル人民革命党の成立に尽力した。
- (12) 二木1984 p.106等
- (13) 中田1977 pp.553-556、『社会史略』 pp.14-30、呉・何1982 pp.467-481、陳1982 pp.482-489、魏1982 pp.490-510、『歴史選輯』 pp.592-600
- (14) 新疆の漢人ムスリムをこう呼ぶ。
- (15) 中田1977 pp.556-565、『社会史略』 pp.35-36、魏1982 pp.510-512
- (16) 楊は1860年に雲南で生まれ、科挙に及第して甘肅等で官吏を務めた後、新疆に至った（中田1977 pp.552-553、『社会史略』 pp.34-35、Nyman1977 p.20、馮1934 p.34）。
- (17) 『社会史略』 pp.119-122、『史綱』 pp.488-490
- (18) モンテネグロ出身のロシア帝国の軍人。ロシア革命後、ソヴィエト＝ロシア軍と戦いながら中央アジアを東へ後退し、新疆、西モンゴルに至った（Ганин2004等）。
- (19) 寺山2002 p.105、Nyman1977 pp.38-41、馮1934 pp.41-42、Ганин2004 pp.109-141、Бармин1999 pp.42-55
- (20) 『社会史略』 pp.80-98、坂本1974 pp.61-62、馮1934 pp.42-43、Ганин2004 pp.141-174、スラヴィンスキー2002 p.48、励声2004 pp.355-358、Бармин1999 pp.55-62
- (21) 寺山2002 p.105
- (22) 『社会史略』 pp.38-41
- (23) 清水2000 p.89等。
- (24) 新免1990 pp.2-8、新免1994 pp.5-6、王1995 pp.9-11,15-18、大石1999 pp.26-39、清水2000 pp.89-91、木下2001 pp.140-145
- (25) 『博爾塔爾簡史』 pp.60-61
- (26) バルハシ湖南方の広大な地域の名称。現在のカザフスタン南東部とクルグズスタン北部に当たる。カザフ語及びクルグズ語「ジェティス」のロシア語訳（『事典』 p.285）。
- (27) Лонжид1994 pp.9-17
- (28) 本稿では、新疆と外モンゴルの間に位置するアルタイ山脈南麓一帯をこう表記する。ホブドとアルタイ地区では、モンゴル独立運動の際にボグド＝ハーン政権軍と中華民国軍の間で激しい戦闘が行われた（包爾漢1984 pp.31-33、Жамсран1997 p.63、『衛拉特史』 pp.271-272等）。1918年には北京政府がアルタイ＝ウリヤンハイ7旗にザサグ印を与え、アルタイ地区を新疆の管轄下に置いた（『衛拉特史』 p.250、包爾漢1984 p.33等）。
- (29) 『衛拉特史』 pp.272-274、『史綱』 pp.498-501、oyirad pp.371-378
- (30) 1920年4月16日付新トルグート部四等タイジのゴンボジャブ等発楊増新宛文書（『新疆档案』 pp.4-5）及びこれに対する1920年4月20日付新疆省政府の返答（『新疆档案』 p.5）。
- (31) Лонжид1994 pp.18-50、Мягмарсамбуу2008 pp.16-31 ソミヤーとデムベレルが人民党の活動に関与する過程についてはデムベレルの回想録（Demberel）に詳しい。
- (32) Лонжид1994 pp.44-45、Мягмарсамбуу2008 pp.34-35
- (33) これが西暦か共蔵暦かは不明だが、いずれにせよ西暦の4-6月頃であろう。
- (34) Demberel pp.85-86
- (35) エルベグドルジ＝リンチノ。著名なブリヤート＝モンゴル人活動家である。コミンテルン極東書記局モンゴル・チベット課課長を務め、人民党の活動にも深く関与した。人民政府では全軍評議会議長を務めた。
- (36) 人民党は1925年にモンゴル人民革命党に名称を変更した。

- (37) Ринчино pp.116-126
- (38) ウールド営は、清代に設けられたイリ駐防八旗の一部を形成する集団であり、上三旗と下五旗に分かれる（小沼2005、『伊犁歴史』 pp.114-126等）。
- (39) Мягмарсамбуу2008 pp.50-58
- (40) 中央アジアでは、ムスリム住民の自治を追求したトルキスタン自治政府が1918年2月にソヴィエト政権等の軍力で解体された。1918年4月30日にトルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国が成立し、同年6月17日にトルキスタン共産党が成立した（ИКОСА pp.259-270、Турк20в pp.115-119、『事典』 pp.389-390）。1920年10月にはコミンテルンのトルキスタン局が設立された（Такенов1983 p.224）。
- (41) この文書の「カルムイク」はトルグートのみを指すのではなく、新疆モンゴル人全体を指すと思われる。
- (42) 漢字名は伊寧。イリの主要都市。
- (43) РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.16-Л.24
- (44) 例えば、1924年3月15日付と思われるタシケントのナーツォフ発人民政府宛電報（ГХТА Х.1-Д.1-Х/Н.62-4-по.8）、1925年4月29日付コミンテルン執行委員会東方局局長 F.F.ベトロフ、コミンテルン執行委員会東方局極東課課長 G.N.ヴォイチンスキー宛ナーツォフ発電報（РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.31-Л.19）。
- (45) 1922年9月7日頃であろう。「共戴」は当時外モンゴルで用いられた年号である。
- (46) ウールド営は上三旗と下五旗に分かれるため、「中旗」が何を指すのかは不明である。
- (47) 原文は район。デムベレルが招集したタルバガタイ、チャハル左右翼、ウールド等を指すと思われる。
- (48) РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.16-Л.22-23
- (49) アビライは1913年にボグド=ハーン政権の内モンゴル派遣軍にソミヤーと共に従軍し、1921年の人民臨時政府代表の新疆派遣計画にも参加した。ツェレンは、アビライと共に内モンゴル派遣軍や人民臨時政府の新疆派遣計画に名が現れるツェレンドルジだと推定される（Лонжид1994 pp.15,44）。
- (50) РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.16-Л.24
- (51) Ринчино pp.126-127
- (52) 共戴13年11月20日（1923年12月28日）付のホブド大臣等宛人民政府発文書には、人民政府からツァーガンビリグ公を盟長、ナツァグドルジ公を将軍としてアルタイ地区へ派遣したことに対するアルタイ地区道尹、アルタイ=ウリヤンハイの旗の反発が記されている（УТА Ф.1-Д.1-Х/Н.17-XX.60-63）。また、アルタイ地区道尹に対して人民政府のアルタイ地区統治の正当性を主張したリンチノの書簡もある（Ринчино pp.34-38）。
- (53) マトヴェイ=アマガエフ。ブリヤート=モンゴル人活動家。1923年に成立したブリヤート=モンゴル自治ソヴィエト社会主義共和国でブリヤート=モンゴル共和国中央執行委員会代表に選出された。後にモンゴル駐在コミンテルン代表を務めた（ВБД3 pp.6-8）。
- (54) 1923年9月以降、ソ連代表 L.M.カラハンが行った中ソ公式交渉では、交渉終結後に、外モンゴルの国際的地位を協議するモンゴルと中華民国の交渉を行なうことが想定されていた。
- (55) ロシアの文書では新疆はしばしばこう表現される。
- (56) 「ブリヤート共和国中央執行委員会代表アマガエフとの対話」（モンゴル駐在ソ連全権代表部通報 no.10 РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.29-Л.208）。この史料は1924年5月頃のものであろう。
- (57) 原文の сейм はモンゴル語のチョールガンを指す。モンゴルでは行政単位毎に王公を招集する会議が設けられ、チョールガンと呼ばれた。
- (58) РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.16-Л.20-21об 1923年初頭、ソミヤーはフレーのソ連全権代表部を通じてソ連政府にイリへの援助を要請した（ГХТА Ф.2-Ш.18-XX.23-25）。
- (59) Мягмарсамбуу2008 pp.57-58
- (60) この文書の「ウイグル住民」は、「タランチ、ドンガン、カシュガル人」とされている。タランチは、ジュンガルや清朝によってイリに移住させられ、農耕をさせられた天山南路出自のトルコ系農民を指す（『事典』 pp.67,73）。

- (61) РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.16-ЛЛ.24-24об
- (62) ホジャ=ヤロフは革命連合「ウイグル」の代表でトルキスタン共産党メンバー、ミラム=イミノフはクルジャのタランチの代表、シャイフ=ハフィゾフはアルティ=シャフルの革命地下組織の代表、ハシム=ハジェフは革命連合「ウイグル」のジェティス州委員会代表でトルキスタン共産党メンバーであった。
- (63) これらの組織には中国出身の「ウイグル人」やドンガンが加わったが、漢人は殆どいなかった（Такенов 1983 p.225）。
- (64) 現アルマトィ。
- (65) この大会で結成された中国出身労働者セミレチエ州委員会に、ハシム=ハジェフが含まれている。タケノフは彼を「非党员」と表記している（Такенов1983 p.226）。
- (66) タリム盆地周縁のオアシス地域。
- (67) Бармин1999 pp.87-88、『事典』p.445、Такенов1983 pp.224-227
- (68) Ринчино p.126
- (69) Ринчино p.126
- (70) Ринчино p.210
- (71) 1923年8月2日付ヴォイチンスキー宛リンチノ発機密電報でリンチノはナーツォフを「中国トルキスタンにおけるモンゴル人民革命党代表」と記した（РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.18-Л.11）が、彼の経歴や派遣目的を考えると、彼がコミンテルン職員としての役割を担ったと考えてよからう。
- (72) ВБДЗ p.11
- (73) 1923年9月5日付コミンテルン執行委員会東方課発行のナーツォフの身分証明書（РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.18-Л.8）。
- (74) Бармин1999 pp.88-89
- (75) クルジャの西北方に位置する都市。
- (76) РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.24-Л.3
- (77) ベトロフ宛ナーツォフ文書（ГХТА Ф.2-Х/Н.73-Х.3（原文書はРГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.24））。この文書は1924年末-1925年のものであろう。この計画はモンゴル駐在コミンテルン代表 Т.ルィスクロフが発案した。当時、フルンボイル及び内モンゴルの活動グループが内モンゴル人民革命党を結成した。ルィスクロフの計画はこれに新疆を結びつけるものであったと推測される。
- (78) Ринчино pp.208-209
- (79) Ринчино pp.208-209
- (80) ウンゲルン討伐のために外モンゴルに入ったソヴィエト軍は、その後外モンゴルに駐屯し続けた。
- (81) 1917年以降外務に携わり、ソヴィエト=ロシア外務人民副委員、中国駐在外交代表等を務めた。
- (82) 1923年3月23日付ジャダムバ発人民政府外務省宛電報（ГХТА Х.1-Д.1-Х/Н.90-но.653194）。
- (83) Бармин1999 p.89
- (84) Мамаева1999 pp.20-68、スラヴィンスキー2002 pp.103-119等。
- (85) 中ソ公式交渉におけるカラハンの前任者。
- (86) ロシア人は当時フレーをこう呼んでいた。
- (87) ВКК p.195
- (88) ПСЧК pp.156-157
- (89) バスマチ運動とは、ロシア革命後の内戦期以降、ソヴィエトに反抗した中央アジアのムスリム住民の武力闘争である。場所によっては1930年代までソ連を苦しめた。バスマチ運動に大きな役割を果たした層は様々であり、部族長から青年運動家までがバスマチ運動を指導した（『事典』pp.428-429、Басмачество p.114、Турк20в pp.164-243, 363-379、帯谷1992、帯谷1998）。
- (90) これに関しては青木2008b、青木2008a pp.186-191を参照。

(91) 中ソ交渉におけるソヴィエトの目的の1つは国境の安全保障であった（青木2008b pp.03-06）。

# ○公文書史料

ГХТА：モンゴル国立外務中央文書館所蔵史料

РГАСПИ：ロシア国立社会政治史文書館所蔵史料

УТА：モンゴル国立中央文書館所蔵史料

# ○刊行史料集

Demberel: Demberel. *Mongol arad-un qubisqaltu nam-un nigedüger qural*. Верхнесудинск. 1931

ПСЧК: Составитель А.И.Каргунова. *Переписка И.В.Сталина и Г.В.Чичерина с полпредом СССР в Китае Л.М. Караханом*. Москва. 2008

Ринчино: Б.В.Базаров, Б.Д.Цибиков, С.Б.Очиров ed. *Элбек-Дорджи Ринчино о Монголии*. Улан-Удэ. 1998

『新疆档案』：新疆维吾尔自治区档案局、中国社会科学院边疆史地研究中心、『新疆通史』編撰委員会編『近代新疆蒙古歴史档案』、烏魯木齊、2007

ВКК: Редакционная коллегия Го Хэньюй, М.Л.Титаренко и др. *ВКП(б). Коминтерн и национально-революционное движение в Китае*. Т.1. 1920-1925. Москва. 1994

# ○参考文献

## ・日本語

青木2008a：青木雅浩「モンゴル、ロシアの公文書史料とモンゴル近現代史研究－フルンボイルに対するモンゴル人民政府の姿勢（1921-1924）を一例に－」、『史滴』30、2008

青木2008b：青木雅浩「ロシア・モンゴル友好条約締結交渉におけるウリヤンハイ問題」、『東洋学報』89-4、2008

王1995：王柯『東トルキスタン共和国研究』、東京大学出版会、1995

バトバヤル・シャラフー1998：Ts・バトバヤル、D・シャラフー「1920年代におけるモンゴル・ロシア関係とウリヤンハイ問題」、『一橋論叢』120-2、1998

二木1984：二木博史「ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助」、『一橋論叢』92-3、1984

『事典』：小松久男、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可、堀川徹編集『中央ユーラシアを知る事典』、平凡社、2005

木下2001：木下恵二「楊增新の新疆統治」、『法学政治学論究』48、2001

中田1977：中田吉信「新疆都督楊增新」、『江上波夫教授古希記念論集 歴史篇』、山川出版社、1977

帯谷1992：帯谷知可「フェルガナにおけるバスマチ運動。1916-1924年」、『ロシア研究』51、1992

帯谷1998：帯谷知可「ウズベキスタンにおけるバスマチ運動の見直しとその課題」、『地域研究論集』v.1.no.2、1998

小沼2005：小沼孝博「イリ駐防八旗の設置について－清朝の新疆支配体制の構築に関する一考察」、『東方学』110、2005

大石1999：大石真一郎「ウイグル人の近代－ジャディード運動の高揚と挫折」、『アジア遊学』1、1999

坂本1974：坂本是忠『辺疆をめぐる中ソ関係史』、アジア経済研究所、1974

清水2000：清水由里子「1930年代の新疆におけるトルコ系ムスリムの教育運動について：カシュガルを中心に」、『聖心女子大学大学院論集』22、2000

新免1990：新免康「新疆ムスリム反乱（1931-34年）と秘密組織」、『史学雑誌』99-12、1990

新免1994：新免康「東トルキスタン共和国（1933-1934年）に関する一考察」、『アジア・アフリカ言語文化研究』46/47、1994

スラヴィンスキー2002：ボリス・スラヴィンスキー、ドミートリー・スラヴィンスキー著、加藤幸廣訳『中国

革命とソヴェト。抗日戦までの舞台裏。1917-37年』、共同通信社、2002

寺山2002：寺山恭輔「1930年代初頭のソ連の対新疆政策」、『東北アジア研究』6、2002

・英語

Nyman1977：Lars-Erik Nyman. *Great Britain and Chinese, Russian and Japanese interests in Sinkiang, 1918-1934*. Sweden. 1977

・モンゴル語

Лонжид1994: З.Лонжид. *Түшээт хан аймгийн их түшээт уулын хоньдуг ягзуун баатар Лаварын Сумъяа*. Улаанбаатар. 1994

Мягмарсамбуу2008: Тахилт овгийн Галиндэвийн Мягмарсамбуу. *Лаварын Дэмбэрэл*. Улаанбаатар. 2008  
oyirad: "oyirad mongyul-un tobči teüke"-yi nayirayulun bičikü duyuylang. *oyirad mongyul-un tobči teüke*. douradu debter. ügümči. 2000

Пүрэв2001: Отгоны Пүрэв. *Ардын засгийн анхны ерөнхий сайд*. Улаанбаатар. 2001

Жамсран1997: Хэрээд Л.Жамсран. *Монголын төрийн тусгаар тогтнолын сэргэлт*. Улаанбаатар. 1997

・ロシア語

Бармин1999: В.А.Бармин. *Советский Союз и Синьцзян 1918-1941гг*. Барнаул. 1999

Басмачество: А.И.Зевелев, Ю.А.Поляков, Л.В.Шишкина. *Басмачество*. Москва. 1986

ВБДЗ: Составители Ш.Б.Чимитдоржиев, Т.М.Михайлов. *Выдающиеся бурятские деятели*. Вып.3. Улан-Удэ. 1999

Ганин2004: А.В.Ганин. *Черногорец на русской службе: Генерал Бакич*. Москва. 2004

ИКОСА: Председатель А.М.Богоутдинов. *История коммунистических организаций Средней Азии*. Ташкент. 1967

Мамаева1999: Н.Л.Мамаева. *Коминтерн и Гоминьдан 1919-1929*. Москва. 1999

Такенов1983：А.С.Такенов. К вопросу участия уйгурских трудящихся в революционном движении в Семиречье. *Актуальные проблемы советского уйгуроведения*. Алма-Ата. 1983

Турк20в: Академия наук Республики Узбекистан. Институт Истории. *Туркестан в начале 20 века*. Ташкент. 2000

・中国語

包爾漢1984：包爾漢『新疆五十年』、北京、1984

『博爾塔爾簡史』：武立德主編『新疆博爾塔爾蒙古族發展簡史』、北京、2003

陳1982：陳慧生『資產階級領導的迪化起義』、『新疆歷史論文統集』、1982

馮1934：馮有真『新疆視察記』、上海、1934

励声2004：励声『哈薩克斯坦及其與中国新疆的關係』、哈爾濱、2004

『歷史選輯』：新疆社会科学院歷史研究所『新疆地方歷史資料選輯』、張家口、1987

『社会史略』：白振声、鯉淵信一主編『新疆現代政治社会史略（1912-1949年）』、北京、1987

『史綱』：馬大正、成崇德主編『衛拉特蒙古史綱』、烏魯木齊、2006

魏1982：魏長洪『伊犁辛亥革命論述』、『新疆歷史論文統集』、1982

『衛拉特史』：新疆師範大学学報編輯室『衛拉特史論文集』、烏魯木齊、1987

吳・何1982：吳廷植、何玉畴『辛亥革命在新疆』、『新疆歷史論文統集』、1982

『伊犁歷史』：姜崇倫主編『伊犁歷史與文化』、烏魯木齊、2004